“カッコ悪い” 私を必要とする人がいる

数年前までは、情報番組のＡＤでした。
ファッション、スイーツ、オリンピックetcと、一番の「旬」をいかに放送するか、学んだのは、「どう伝えるか」でした。
社会部の記者になってからは、事件現場の最前線に行き、緊迫感や面白さと、同じだけの怖さ、責任を知りました。そして「どう伝えるか」ではなく「何を伝えるべきか」を知りました。
現場は一つもカッコイイことはないです。ビルの駐車場で１ヶ月張り番したり、一日中「Ａさん知りませんか」とピンポンして回ったり。しかし、そうして取材し放送したものを見て、怒りを共有してくれたり、納得してくれたり、二度とこういうことを起こしたくない、と思ってくれる人たちがいます。取材に協力してくれた人に「あなたに話して良かった」と言われたい、遺族の「何であの子が‥‥」の思いを少しでも軽くできたら、そう思っています。友だちから「なんでマスコミなんかに」と言われることもありました。ディレクターとして、また番組で働き始めた今の私は、こう答えます。
「カッコ悪い私を必要とする人がいたから」。

林　智子　ディレクター

CAMERA MAN

地球はでっかくて美しい！

これまでカメラマンとして南海の孤島・氷河・砂漠などさまざまな顔の地球を見てきました。こんな所に人が住んでいるのか？風の音や鳥の声しか聞こえないそんな荒涼とした風景が広がる場所に立つと、人間は小さいなぁとつくづく感じ、その反面、厳しい自然環境の中で生きている人々を見ると人間の力強さも感じます。そしてこの美しい地球環境は永遠に続いてほしいものだと感じさせられます。
そんな大きな地球をファインダーの中に収めていくのは難しいのですが、そこに住む人々の思いや美しい風景をきちんと伝えて行く事で、こんな風景を大切にしなければと思う人が一人でも増えるようにと撮影をしています。
私達の仕事はチームワークが大切で、その場の状況をディレクター、ＶＥと三人で見つめ、瞬間を的確に切り取っていく事が必要であり、そんなスタッフの思いが番組の中で表現でき、少しでも皆さんに問題意識が伝わればと思いつつ、日々でっかい地球の上を駆け回っています。

奥山 哲史　カメラマン

Photo : NEWS 23　アイスランド取材にて

放送を支える 現場スタッフの声

日本国内のみならず、世界を舞台に弊社スタッフは日夜テレビマンとしての誇りをもって活躍しています。

VIDEO ENGINEER

大空を相手に速報を担う

報道技術部はENG取材、伝送、中継など、さまざまな分野でVE＝ビデオエンジニア業務を行っています。
その一つヘリの仕事は、基本的には関東全域を主な活動範囲としていますが、大事件や大災害などの際には、日本全国に赴き航空取材にあたります。
報道、制作、スポーツ中継などで上空撮影を行いますが、緊急時には機動性、速報性に優れているヘリコプターは、映像の第一報を素早く届ける役割が期待されます。上空から受信基地を経由して映像（ときに生中継）を送り、また地上から打ち上げられた映像を受信してヘリ経由の伝送で一役買うこともあります。
いつも瞬時の対応が求められ、責任の重さにプレッシャーものしかかってきますが、速報に成功したり、他社よりも早くオンエアに繋がったときは、なんとも言い難い充実感と達成感があります。
ヘリスタッフは日々さまざまな条件に対応しながら、日本の大空を飛びまわっています。

徳田 尊仁　ビデオエンジニア

Photo : 緊急出動する取材ヘリ

DIRECTOR

感性で挑むスポーツニュース

オリンピックや世界陸上などスポーツでは花形といわれる現場を幸せにも多く踏ませてもらい、メダル獲得の瞬間や歴史的な快挙といった場面を目撃してきた。その経験から言わせてもらうと、スポーツニュースとは、勝利や記録更新を目指す選手たちのほんの一瞬を自分の目線で切り抜くことが仕事だ。
そんな仕事で僕が一番大事だと思っているのが、自分の持っている「感性」。チャンスやピンチの表情、喜んでいる姿、悔しがる表情。荒い息遣いや大量の汗。そして選手が発する言葉‥。それらからいったい何を感じるか。
感じ方は十人十色だが、スポーツの現場では自分の感じたことが全てで、最優先される情報だと思う。放送では自分の感じたことを基に情報を集め原稿化。あとは、同じになりがちな表現をどう工夫するかという難しさはあるが、スポーツニュースという仕事は自分の素直な感情をそのまま生かせる、テレビでは数少ない場所だと思っている。

長原　進　ディレクター

Photo：アテネオリンピックにてキューバのボクシング選手と

CAMERA MAN

郷に入っては郷に従え

カメラマンになって３ヶ月、横綱朝青龍の帰国騒動でモンゴル取材に赴きました。モンゴルって草原に馬や羊かなぁなどと考える間も与えられず、飛行機を降りてすぐ深夜の草原を朝青龍の滞在先であるハラホリンへと向かいました。車のドアや天井に体中をぶつけながら、車内の男４人がぐるぐると洗濯機のようにかき混ぜられます。そこで私たちは猛スピードで走る１台の４輪駆動車を発見しました。朝青龍が乗っているに違いない。私はカメラを担ぎました。車内では自分の体を固定させることもままなりません。映像は翌朝、衛星伝送装置で東京に送られました。
モンゴルは同じアジアとはいえ日本とはまったく環境が異なります。
郷に入れば郷に従え。適応能力とそれに耐える精神力が必要です。
どんなところに行っても何とか取材をし、何とか映像を東京に届ける。
大変ですが、それが報道の仕事の醍醐味だともいえます。
それにしてもあの車の揺れで機材が壊れなくてよかったなぁ・・。

大賀 広之　カメラマン

Photo：モンゴル取材にて

VIDEO ENGINEER

与えられた“VE”という職

久々に出会った知り合いに「何の仕事してるの？」と聞かれる事がある。「ビデオエンジニア（VE）やってるんだよ」と言葉を返すが世間一般の人にとって“VE”という仕事はあまりイメージが沸かないと思う。ついこないだまで自分もそっち側の人間だったのだ。
自分が今“VE”として日々行っていることはニュース取材でありカメラマンのアシスト、議員にライトを当てたり（照明）、会見で音を録ったり（音声）、また局を朝４時に出発して一日中外での張り番もある。しかしこれだけが“VE”の仕事ではない。FPU、SNG、ヘリ、IPなど自分がまだ挑戦したことのない“VE”の仕事は沢山ある。
何も分からず飛び込んだ報道の世界。毎日が新鮮であり、未だ学生気分が抜けていない自分は徐々に先輩方のプロ意識に刺激され、一つ一つの仕事に“責任”を感じ始めている。
そして今の自分が言えるのは「VE＝遣り甲斐を感じられる職」である。

椎野 ゆり子　ビデオエンジニア

Photo：映像伝送アンテナの方向調整

「エフ・アンド・エフを語る」

「TBSでエフ・アンド・エフは実にいろんな仕事をしていますね」

森　雄吾（ネットサービス部）：

「海外班の私のところは世界中のニュース現場から映像や記者リポートをTBSに衛星回線などでつなぐ仕事です。海外ナマ中継も頻繁です。スタッフは語学が堪能な国際回線のプロフェッショナルばかり。１分１秒を争う難しいオペレーションもしょっちゅうですが、それをやり遂げて海外の現場と映像が繋がった瞬間に報道局のフロアから自然と湧き上がる拍手がこの部署の大きな役割と重要性を示しているし、やりがいを強く感じるのもそんなときですね」

経堂　敦（REFLEX INC.出向）：

「エフ・アンド・エフの唯一の海外拠点としてワシントンにいるのですが、仕事はもっぱらTBSワシントン支局の映像取材と編集・伝送といったところです。
海外で仕事することは夢でもありましたが、アメリカの政治の中心というだけでなく世界中のジャーナリストが集まりますから、世界で今なにが起きて、国際ニュースはそれをどう伝えようとしているか、などに常に注意を振り向けながら、自分の脳の国際化革命を怠ってはいけないという義務感も強く感じています」

「報道活動以外でもTBS番組に深くコミットしていますが」

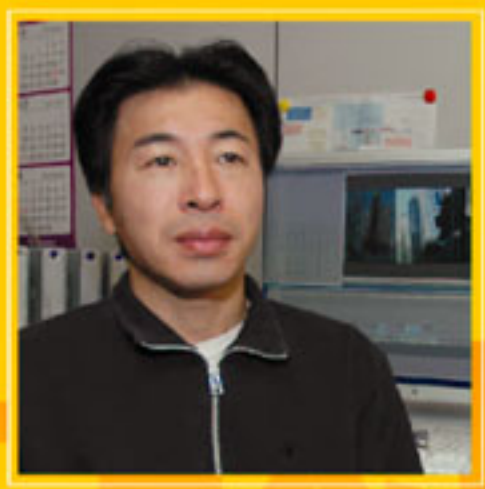
大塩　稔（CG部）：

「この部はTBSの技術局CG部を仕事場にして、ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティーなどの番組や映画の映像制作を手がけています。
やっていることは２D、３Dのアニメ、バーチャルスタジオ、コンポジットなど多種多様です。
今のテレビ番組がどれだけCGに依存しているかがよくわかります。
コンピュータによる映像制作の普及は必然なんですね。実感として、番組の欠かせない構成要素として、これからのテレビをさらに育てていくんだと思います」

菅井 弘之（コンテンツ事業部）：

「私たちはTBS映像アーカイブの管理運営を任されています。赤坂と横浜・緑山の自動倉庫に保管されているビデオは実に１００万本近くにのぼります。番組制作の後方支援というわけです。
その役割をしっかり果たすには、膨大な映像を眠ったままにさせないための利用しやすいシステム構築が重要な課題で、これに全力で取り組んでいるところです。
決して表舞台に立つことはありませんが、確実に番組作りの下支えになっているのだと思うとやりがいも感じます」

「TBS以外のパートナーと仕事しているのは・・・・」



日名 達也（企画事業部）：

「国内のローカル局や海外放送局のENG取材と企画番組制作、そして自動車メーカーなど各種企業のビデオパッケージ制作などを担当していますので、私たちのところではマルチ人間が求められています。あるときはカメラマン、あるときはVE、さらにはディレクターとその場に合わせて対応しなくてはなりません。一見、ハードに見えるかもしれませんが、企画立案、撮影、編集、完パケと一連の作業が自分たちでできるのは、大きな楽しみでもあるのです。
責任が大きいのは当然ですが、自分の発想が生かされて番組が出来上がったときの喜びは何物にも代え難いものがあります。それに、なにごとにも貪欲にチャレンジできるのが、この部のいいところですね」